

『獅子皇帝とオメガの寵花』

著：かわい恋

ill：羽純ハナ

宦官に案内され、後宮と宮殿を繋ぐ回廊を歩く。

日が落ちかけ、天はすでに紺色の絨毯に光をちりばめたように星が瞬いているのに、地平に近い部分はまだ真っ赤な夕日の名残りがある。美しい時間帯だ。

故郷の夕焼けを思い出す。

このくらいの時間になると、家々から夕餉の香りが流れてきて、空腹を刺激するのだ。仕事で疲れた体を、男たちは酒で癒した。

山も川もあったマキナの村は、食べものに困ることがなかった。

みんな今頃、楽しく夕餉を囲んでいるだろうか。育ての両親は。友人たちは。可愛がっていたタムタムは。

守るから。

あの生活は、自分が絶対に守るから。だからみんな、幸せに過ごしている。

「ここは皇帝の居室へ直接繋がる専用通路になっております。アヌマーンさまの代において、ここを歩く“花”はあなたさまが初めてでございます」

どきん、とした。

まさか、アヌマーンの居室に呼ばれたのは自分が初めてなのか。

「あなたさまは美貌ぞろいの“花”の中でも抜きん出てお美しいので、必ず陛下がお側に呼ばれるとわたくしも思っておりました。いや、これは世辞などではございませぬぞ。もちろん美貌のみならず、マキナさまの内側から滲み出る気品が……」

急にマキナに媚び始めた宦官に、少々呆れた気持ちになる。

彼の中で、マキナは妃候補の筆頭に躍り出たに違いない。今から媚を売っておこうという算段が透けて見える。

後宮の広間では、宦官は“花”より身分が低いとはいえ、取りまとめ役として居丈高な空気さえ出していたように思う。

村にいた頃のマキナだったら、こういう態度の変化に嫌悪感しか持たなかったろう。だが今は、宮殿という特殊空間において、彼なりの処世術なのだと理解できる。それで親切にしようとはまでは思わないが。

誰しも自分の立場があるのだ。

そう思わなければ、自分のしていることも肯定できないのだと、後ろめたさに蓋をする。

「どうぞ、マキナさま」

宦官がうやうやしく扉を開けると、皇帝の居室に続く手前の間と思われる部屋に出た。正面の

重々しい豪華な扉の両側に護衛兵が立っている。

護衛兵が頷き、宦官が居室の扉を叩く。

「アヌマーンさま。マキナさまをお連れいたしました」

すでにアヌマーンは承知しているのだろう。返事を待たずに護衛兵によって扉が両側に開かれた。

目の前には厚いカーテンが幾重にも下がっている。

「ささ、マキナさま。ここから先はどうぞお一人で奥へお進みください。アヌマーンさまがお待ちでございます」

マキナの背後で扉が閉じられた。

緊張しながら、カーテンをくぐって歩いていく。最後の一枚のカーテンを開けた瞬間、心臓が止まるかと思った。

「ひ……！」

正面に、巨大な雄ライオンと雌ライオンがいたのだ。

立派な鬣を持つ雄ライオンの爛々と輝く琥珀の瞳に見つめられ、後ろ手にカーテンを握ったまま硬直する。

部屋は広く、ライオンまでは距離がある。だが少しでも動いたら飛びかかれそうで。

犬ならば、逃げれば逆に追いかけられる。ライオンはどうだ？ 腹が減っていなければ人を襲わないと聞いた気がするが……。

雌ライオンがマキナを見ながら、のそりと立ち上がる。こちらに向かって歩こうとしたのを、雄ライオンがのどで唸って止めた。

(なんで……。まさか……。ライオンの餌にするためにおれを呼んだ……?)

カーテンを握る手が汗ばむ。

あまりの恐怖に、心臓がばくばくして他になにも考えられない。

と、雌ライオンの陰から、ユンファが飛び出てきた。長く細い尻尾をぴんと立て、マキナの足もとに駆け寄ってくる。

「ユ、ユンファ……」

ユンファは嬉しそうに、マキナの脛に頭をこすりつける。

恐怖の中でそこだけが現実離れして、滑稽な悪夢を見ているような気持ちになった。

雄ライオンが立ち上がると、マキナの心臓がきゅっと縮む。雄ライオンはそのままぐるりとマキナに背を向け、反対側のカーテンの向こうへ消えた。

入れ替わるように、被るだけの簡単な白い長衣を纏ったアヌマーンが出てくる。

「驚かせてすまなかった」

アヌマーンの姿を見て、心底ホッとした。

思わず長い息をつき、崩れるように絨毯の上にしゃがみ込んだ。膝が震えてしまって、脚に力が入らない。

「大丈夫か。すまぬ、おまえが来る前に人型に戻っておこうと思ったのだが、ユンファと遊んでいて遅れてしまった」

「じゃあ……」

さっきの雄ライオンは、アヌマーンの変化した姿だったのか。

ユンファを抱き上げたアヌマーンに腕を引かれ、ようやく立ち上がる。まだ心臓がときどきして痛い。

アヌマーンはマキナを雌ライオンの側に連れていった。アヌマーンを挟んで、雌ライオンの反対側に座らされる。

「こっちの雌ライオンは、ユンファの母でチュウチャウという。赤子の頃から私が飼っているの
で、人間に乱暴はしない。じゃれついてくるかもしれぬが、おまえが恐ろしいなら、別の部屋に
行かせよう」

「いえ、おとなしいのでしたら……」

よく見れば、チュウチャウは穏やかな目をしている。

「私が獣の姿に変わるのは、その方がライオンたちと意思の疎通がしやすいからだ。私を群れの
長と認め、よく従ってくれる。だから城周辺の警護も任せられる」

そういうことだったのか。

ライオンを躡けて警護をさせるなんて、並大抵ではないと思っていた。だが彼が群れの長とい
うならば納得できる。

「こいつも人間姿の私よりライオンの方が好きらしいから、部屋ではよくライオンになっ
ている」

なあ、とアヌマーンは鼻先をすり寄せてくるチュウチャウの頬に口づけた。

まるで仲のよい夫婦のような様子を見て、ハッとした。

まさか……。

「ユンファは……」

「ん？」

ユンファを抱いたアヌマーンと、愛しげに体を寄せる雌ライオン。もしかして――。

「ユンファは、アヌマーンさまのお仔なのですか？」

アヌマーンとチュウチャウの間に生まれた仔なのではないか。ライオンの姿になれば、交尾も
可能である。

アヌマーンは獣を愛する人間なのだ。だからオメガとの間に子を儲けないのだ。きっとそうに
違いない！

ほとんど確信を持ってアヌマーンを見ると、彼の顔立ちには不似合いなほど目を丸くしてい
た。

数秒マキナを見つめたと思うと、ぶっと噴き出すようにして笑い始めた。

「な、なにを……、おまえ……っ、ま、まさかそんなことを思う人間がいるとは……！」

相当おかしかったようで、腹を抱えて体を折り曲げている。

あまりに笑いすぎて息が苦しくなってから、ようやく笑い止めた。それから勘違いに顔を赤く
したマキナの頬を撫でる。

「いや、本当におまえは面白い。私の予想のつかない言動をする」

「申し訳ありません……」

さすがにライオンと契ったと思ったのはおかしかった。

「謝るな。これほど笑ったのは久しぶりだ。笑いで腹が痛くなるということを、何年ぶりかで思い出したぞ」

楽しげに自分を見るアヌマーンの視線に、乙女のように胸が高鳴った。

さっきライオンだった人が、人間になっても精悍な顔立ちのこの人が、マキナにこんな表情を見せる。

アヌマーンは目を細めると、すいと顔を近くに寄せてきた。

「で、私よりユンファを好きなおまえは、人型よりライオンの姿で抱いて欲しいんだっか」

あときは慌てていて同意するようなことを言ってしまったが、さすがにライオンとするのは抵抗がある。

からかわれているとわかっているが、どうやらアヌマーンは初々しいマキナを好みらしい。少しは怯えた演技をしてみせねば。

「ご冗談を……」

やや顔を伏せて、困惑したふりをする。

アヌマーンは笑いながら、マキナの顎をすくって顔を上向かせた。

「しとやかなふりをする必要はない。知っているぞ。おまえが相当気が強くて活発な人間だということは」

内心、うろたえた。

謁見から、後宮の庭で会ったときのこと、この部屋に入ってから今までの自分の言動を急いで振り返ってみる。

どれも素の自分ではなかったはずだ。自分でも驚くほどアヌマーンの前ではおとなしくなってしまうていた。

「なぜそのようなことをおっしゃるのですか」

傷ついたふうを装ってみるが、アヌマーンは笑い飛ばした。

「見ていたからだ。おまえが他の花に転ばされて、やり返していたところを」

動揺が顔に出た。

馬鹿な。あとき他に人はいなかったはず。

「謁見のときは猫を被っているのか探っていたが、アルファの気に中てられていただけのようだったな。庭で会ったときも、演技ではなく気恥ずかしがっているのがわかった。その前に、ユンファと遊び転がっていた人物と同じとは思えないほど初々しくて愛らしかった」

「なんで……」

ユンファと遊んでいるときも、周囲をメイランに見張ってもらっていた。だから田舎で猫と遊んでいるときのように、服も表情も気にせず笑い転がっていた。

アヌマーンはにやりと笑った。

「ライオンの視力は、人のそれとは比べものにならぬ。ライオンに変化した私には見えるのだよ。宮殿のバルコニーから、後宮の様子が」

あっ、と心の中で叫んだ。

後宮の庭からも、宮殿は見える。けれど距離があるから、細かい様子まではわからない。

だが見えるのだ。遠くの獲物を捕らえるための肉食獣の目には。

「おまえは後宮にいる花たちの中で飛び抜けて面白い。私の前で演技をしているかどうかくらいはわかる。活発な様子と、私に見せるもの慣れぬ姿。どちらも本当のおまえだ」

なんと答えてよいかわからず、口を噤んでいた。

自分の中身がばれてしまっているのなら、今さら取り繕っても無駄だ。

アヌマーンの瞳に妖しげな色が宿る。

「おまえは不思議だな。誰よりも神秘的な美しい顔をしていながら、中身はただの少年のよう。他にどんな顔を隠している？」

アヌマーンの顔が、やや傾けられた。

「もっと色々なおまえの表情が見たい」

そのまま、魅惑的な厚みのある男らしい唇が近づいてくる。突然のことで上手に構えることもできず、きゅっと目を瞑った。

「ヒギヤッ」

二人の間で押し潰されそうになったユンファが、苦情の声を上げた。

ほとんど触れるほど近づいていた唇が、重なることなく離れた。

「すまない、ユンファ。痛かったか」

ユンファは不満げにぐうと唸ったが、すぐに前脚で顔を洗い始めた。

アヌマーンはかすかに笑って、ユンファから手を離す。

「さて。ユンファと遊びたいんだったな。私の長話につき合わせても気の毒だ」

上機嫌なアヌマーンは抱いていたユンファをマキナに渡すと、立ち上がって部屋の隅に置いてあった毬とおもちゃを持って戻ってきた。

それをマキナに渡し、チュウチャウを促して扉の方へ歩いていく。チュウチャウはおとなしくアヌマーンの後についていった。

「どちらへ……」

「私がいては素を晒してユンファと遊べぬだろう。この部屋は朝までおまえが使ってよい。私は別室で休むとしよう。遊び疲れたら、ユンファとあのベッドで眠って構わない」

「え……」

アヌマーンの指差した先には、皇帝のものと思われる大きな天蓋つきのベッドが置かれていた。

信じられない。

本当に伽はなしで、ユンファと遊ばせるためにマキナを呼んだのか？

ユンファと遊べるのは嬉しいが、こんな状況はまったく想定していなかったので戸惑う。

「待ってくだ……、あ……っ！」

突如、熱い衝撃が腰から脳天を駆け抜けた。

床に手をついたマキナを、部屋を出ていきかけたアヌマーンが振り向く。

「どうした」

「あ……、あ、あ……、や……、なに……」

頭の後ろがじわりと熱を持つ。

甘い疼きの奔流が腰奥から湧き出し、あっという間に毒のように全身を駆け巡った。

「やあっ……」

仔猫のような甘えた鳴き声を漏らして絨毯に沈んだ。

後孔からぬめった体液が溢れ出て、脚の間をしとどに濡らす。蜜液独特の甘い香りが漂い、嫌でも発情していると知れた。

（どうして……！）

発情期はまだ先だ。

アルファに感応して発情するにしても、こんなに突然強く欲情したりしないはず。初病のときだって、部屋に戻るまでの時間をかけて欲情が強くなっていった。

アヌマーンに抱き起こされれば、人の体温が引き金となって、体の中が爆発したように感じて大きく痙攣した。

「たすけ……っ、たすけて……！」

腰から腹まで焼けた棒を突っ込まれたように熱くて、目の前のアヌマーンにしがみついて助けを乞うた。

肌が汗で濡れてびりびりする。

服が触れている部分も、アヌマーンの腕が支えている部分も、ひたすら感じてしまってどうしていいかわからない。

涙が溢れて、視界が歪んだ。

アヌマーンが舌打ちするような音が聞こえた。

「発情薬を飲んだな」

「知らないっ、そんな、の、知らない……っ！」

覚えがない。

ふと、風呂のあとにメイランが飲ませてくれた薬湯を思い出した。気持ちを落ち着かせるものだと言っていたけれど。

（あれだ）

きっとあの中に発情薬を混ぜていたのだ。

今度こそアヌマーンと体の繋がりを果たさせるために。

「ごめ……なさ……、こん、なの……、する……つもりじゃ……」

苦しくてしゃくり上げながら、アヌマーンの胸を押して体を離そうとした。でもまったく手に入らない。

アヌマーンは眉間に皺を寄せてマキナを抱きしめ、怒りを押し殺したような声で囁いた。

「まったく……、大事にしてやろうと思っていたのに……」

がっかりさせてしまったのだ。

謁見の間にいたオメガのようなことをしてしまったから。

「ごめん……、なさい……」

「どうやら薬を盛られたようだな。おまえのせいではない」

アヌマーンはマキナを抱き上げると、チュウチャウにユンファを連れて別室へ行くよう命令した。

賢い雌ライオンは、ユンファの首を啜えて部屋を出ていった。

「こんな形で不本意だが、花開きするしかないようだ」

額に口づけられ、マキナは熱病にかかったように体を震わせた。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>